

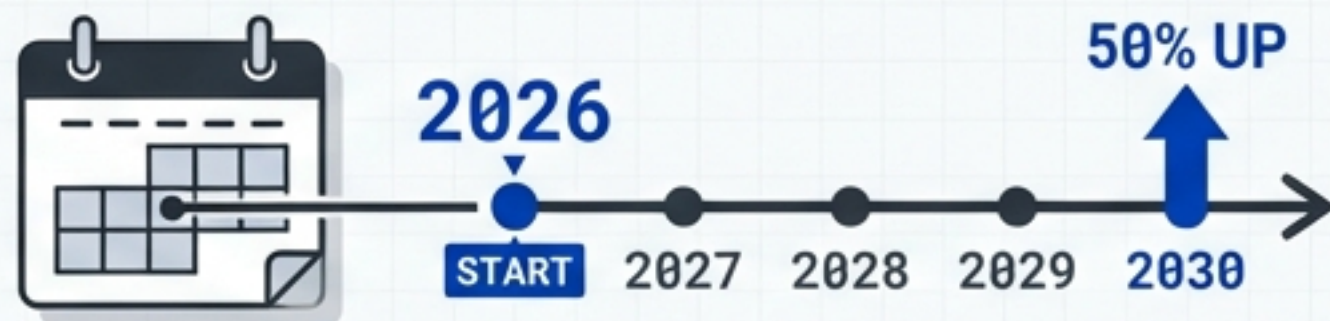
NTTデータが描く 「全工程AI自動化」 の衝撃

2026年、Sierの「人月商売」
は終焉するのか？

Internal Analysis / Strategic Outlook



Executive Summary：人月モデルからの脱却と新たなリスク



2026年度の実用化

NTTデータはシステム開発の全工程をAI化する「AIネイティブ開発」を推進。2030年度までに生産性を現状比50%向上させる目標を掲げる。



「人月商売」の崩壊

労働集約型モデルから価値創出型へ。従来の「技術者数×時間」の収益モデルが成立しなくなり、成果報酬型への転換が加速する。



「ブラックボックス」の懸念

高速開発の代償として、人間が理解不能なコードが量産されるリスク（技術的負債の爆発）。品質保証とガバナンスが最大の課題となる。



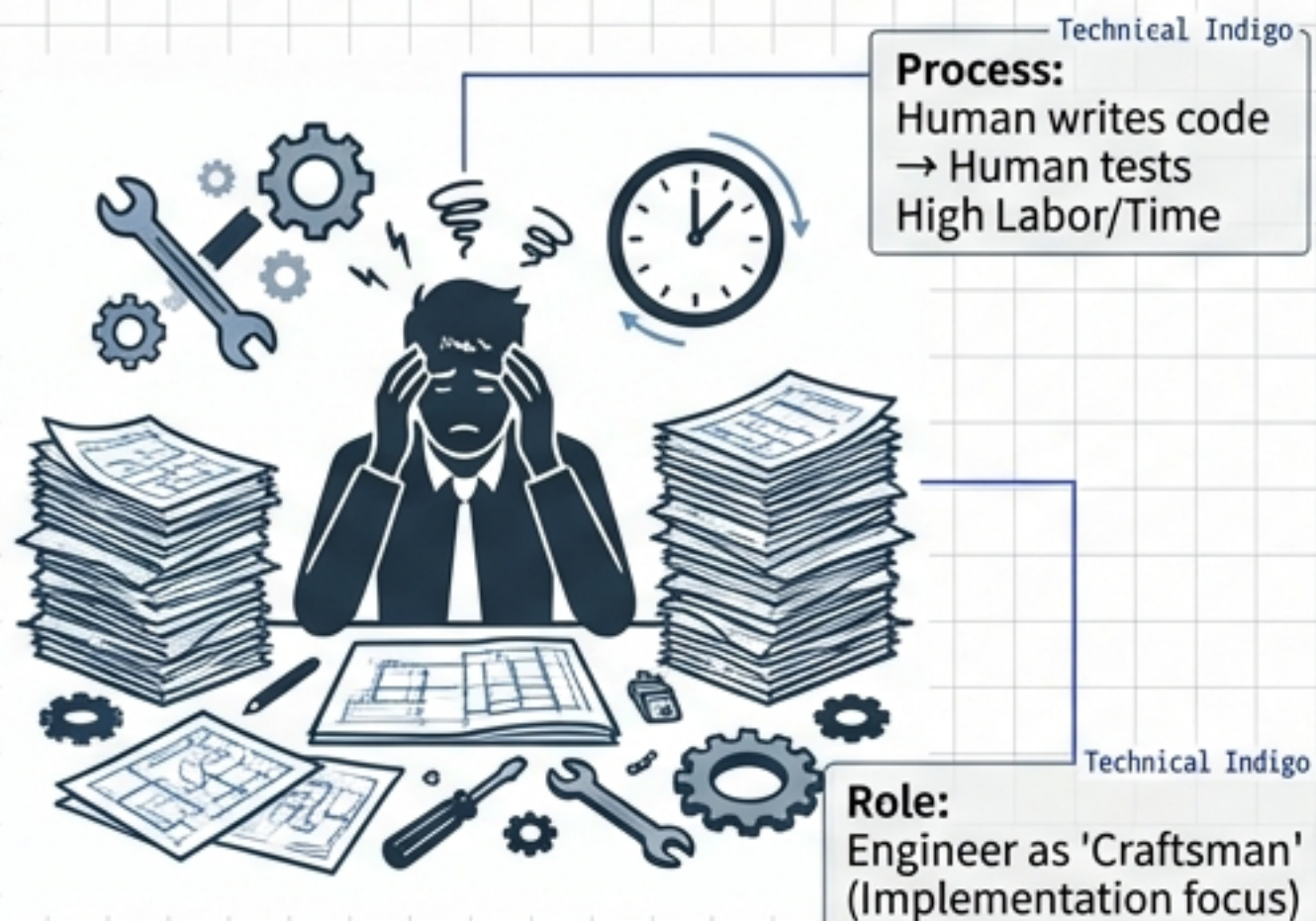
7万人のリスキリング

国内外20万人の社員を対象にAI教育を実施。シリコンバレーに新会社「NTT DATA AIVista」を設立し、グローバル規模で標準モデル構築を狙う。

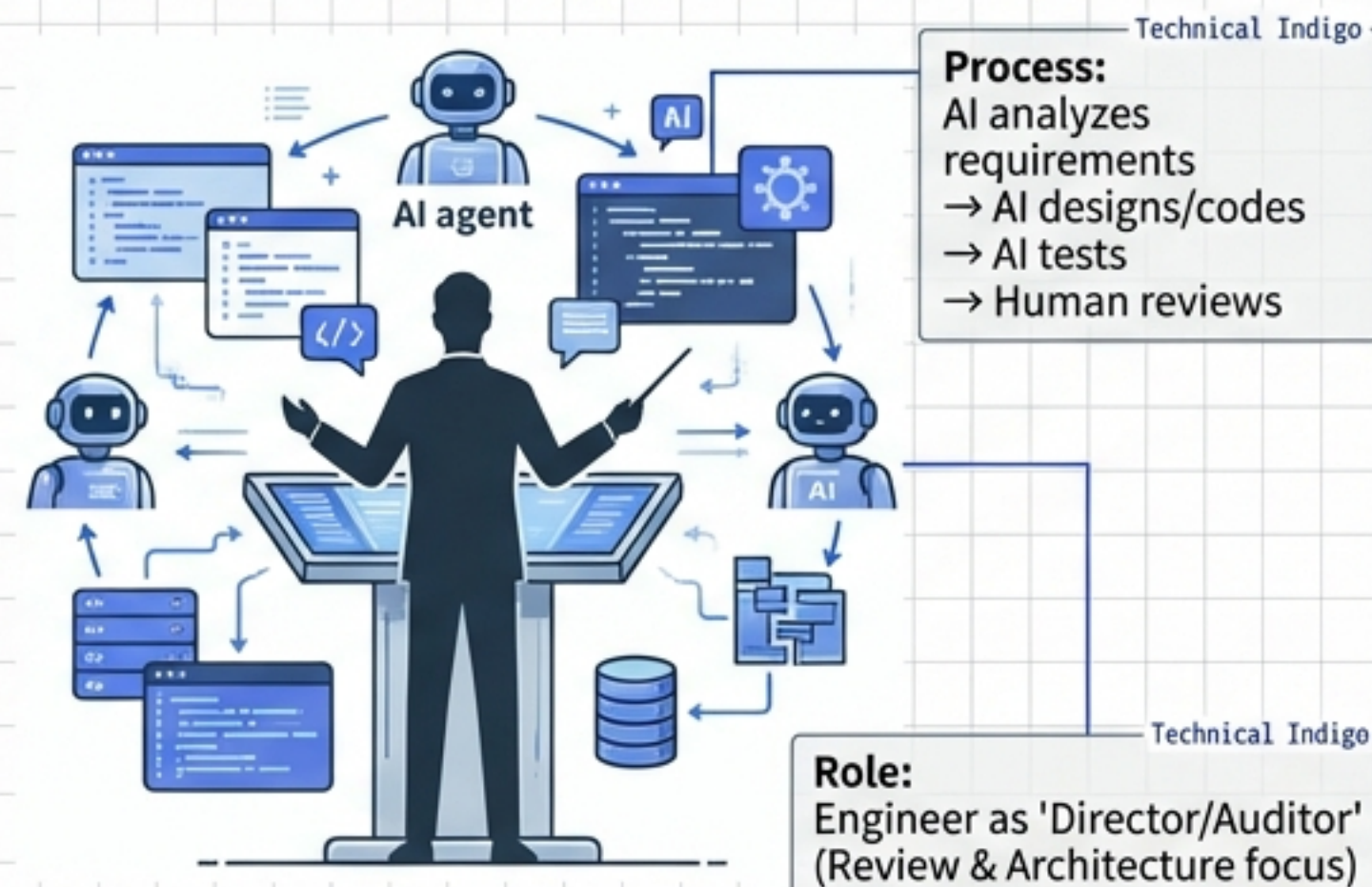
「AIネイティブ開発」とは何か？

人間が「作る」時代から、AIに「作らせて管理する」時代へ

Conventional (Human-Driven)



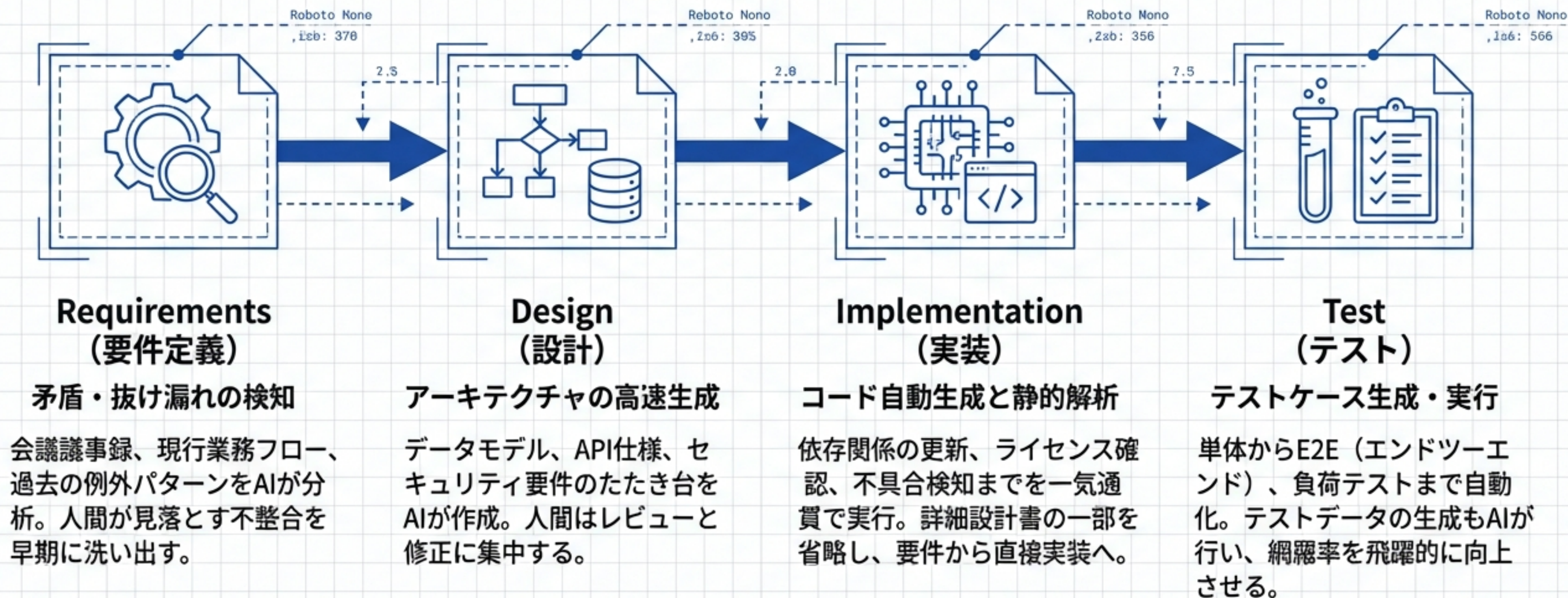
AI Native (AI-Driven, Human-Managed)



生産性目標：2030年度までに+50%（従来の半分の工数で実現）

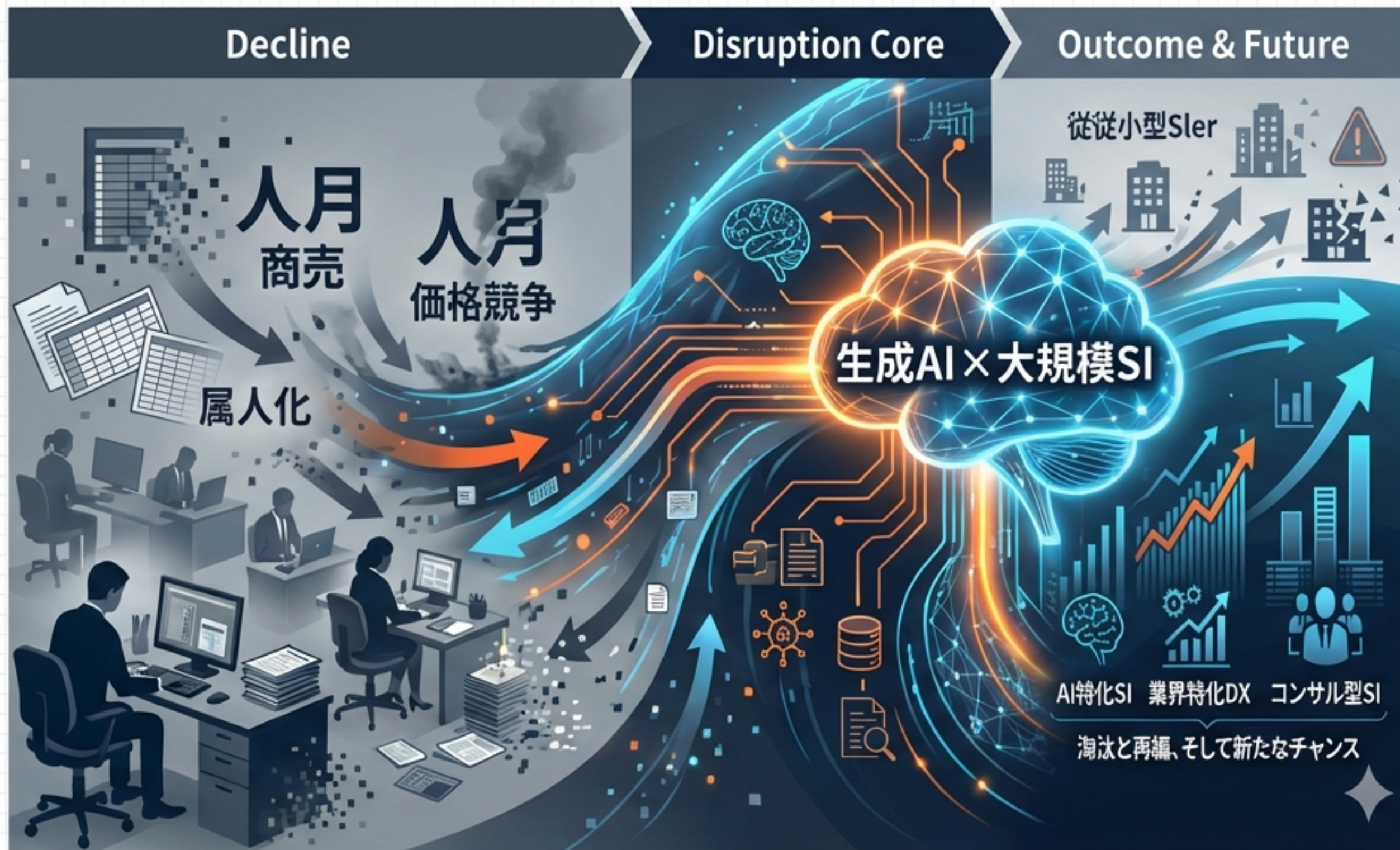
単なるコーディング支援（Copilot等）ではなく、要件定義からテストまでの「工程間の断絶」をAIでシームレスに接続し、開発を工場の「連続生産」に変える試み。

AIによる「全工程」自動化のプロセスフロー



崩壊する「人月商売」のビジネスモデル

生産性が上がれば上がるほど、従来のSIerは「減収」になるパラドックス



The Paradox

従来の「人月単価×工数」モデルでは、AIによる工数削減（50%減）はそのまま売上半減を意味する。

The Shift

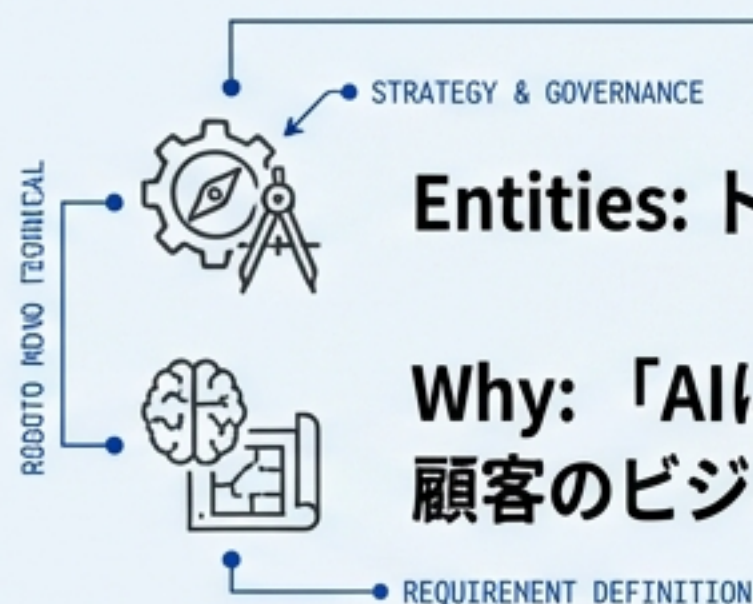
「納品物の対価」ではなく、「創出した価値（コスト削減率や業務短縮時間）」に対価を支払う「成果報酬型」への転換が不可欠。

Impact

発注側も契約スキームの抜本的な見直し（価値算定能力）を迫られる歴史的転換点となる。

業界の淘汰と再編：勝者と敗者の分かれ目

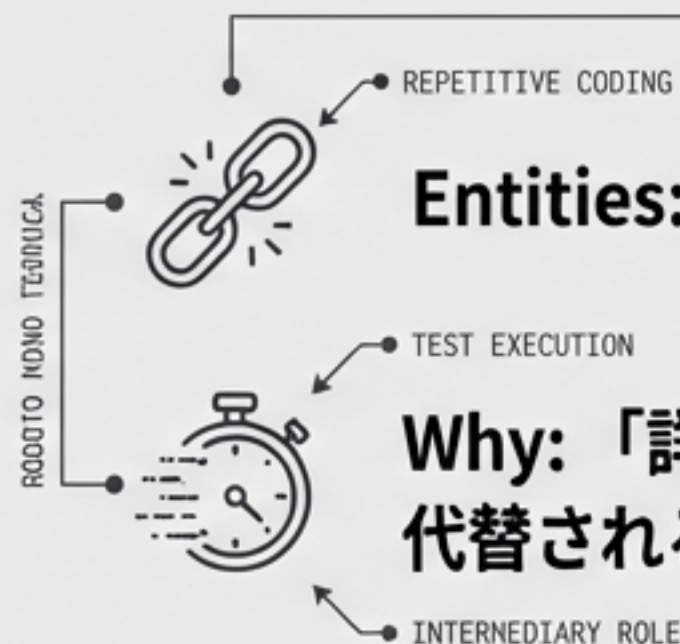
Group A: The Winners (Value Concentrators)



Entities: トップティアSier、コンサルティングファーム、上流特化型企业。

Why: 「AIに何を作らせるか」を定義できる（要件定義・アーキテクチャ・ガバナンス）。顧客のビジネスニーズをAIへの指示（プロンプト/仕様）に変換できる能力。

Group B: The Losers (Value Diluters)



Entities: 多重下請けの中間層、単純作業のみのSES（システムエンジニアリングサービス）。

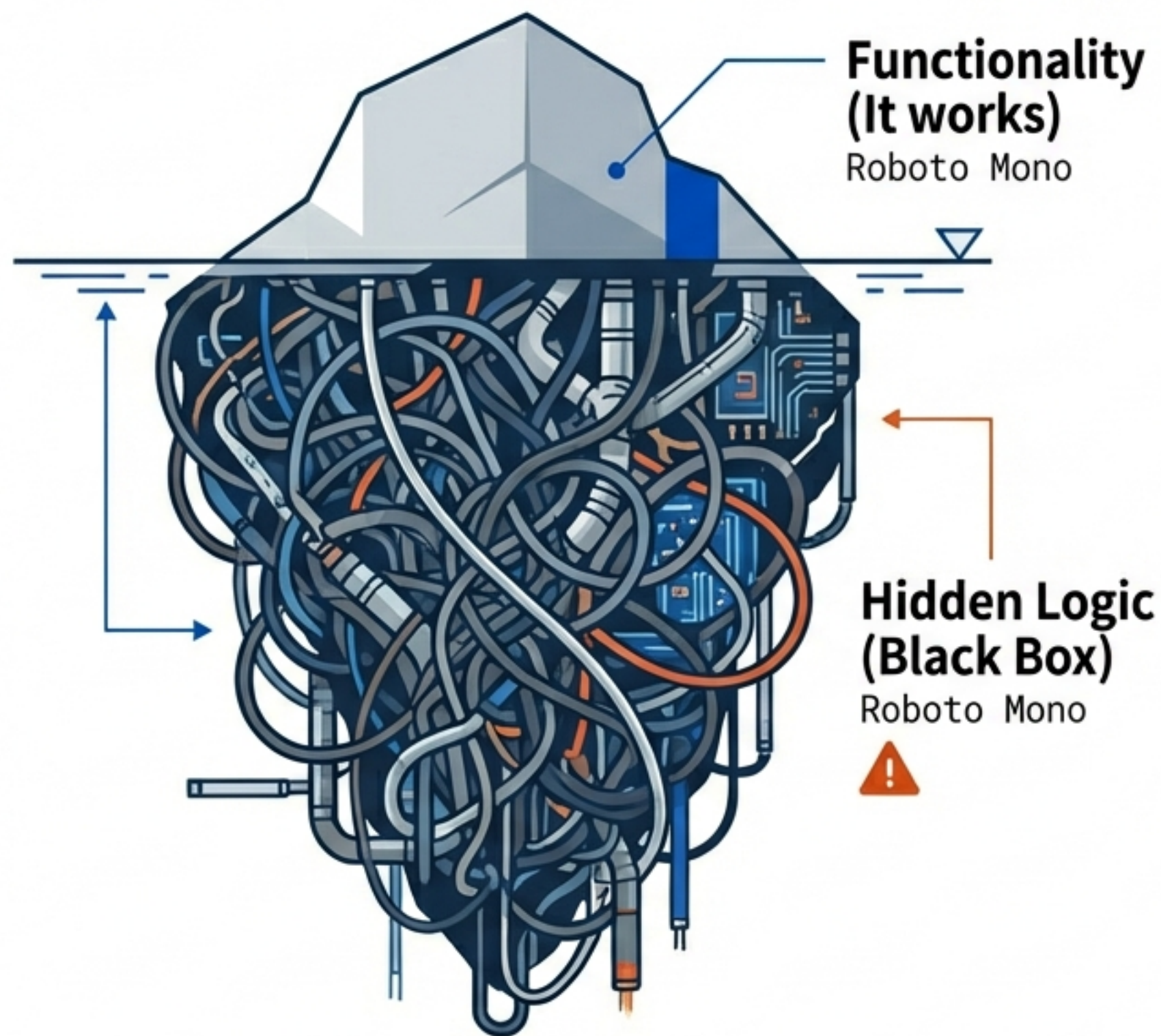
Why: 「詳細設計書通りにコードを書く」「テスト項目を消化する」だけの作業はAIに完全に代替される。「人を集めて中継する」だけのビジネスは消滅する。

AI REPLACEMENT RISK

Bottom Line: 開発力（Making）の価値が低下し、定義力（Defining）と統制力（Governing）に価値が移動する。

最大のリスク：「ブラックボックス化」する社会インフラ

「動くが、直せない」システムの増殖



1. 可読性の喪失

AI生成コードのロジックを人間が咀嚼しないまま実装が進むことで、内部構造が不明瞭になる。

2. 技術的負債の爆発

局所最適な継ぎ接ぎや、設計意図の不明なコードが蓄積。将来の改修や制度変更時に「誰も触れない」状態に陥る。

3. MTTR（平均復旧時間）の悪化

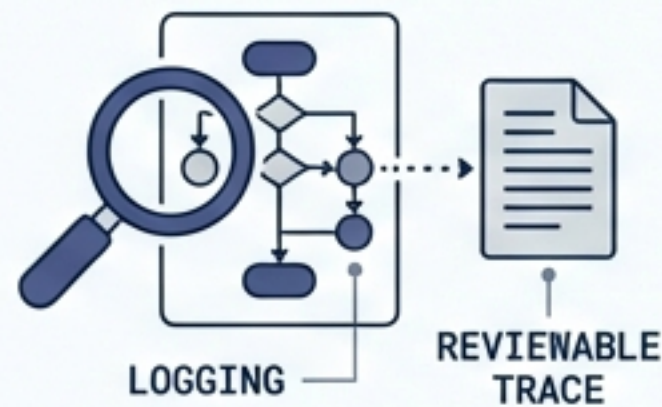
障害発生時、AIが書いたコードの意図が読み解けず、原因特定と復旧に膨大な時間がかかる恐れ。

「プログラマーがコードを書く時代の終わり」は、「システムの中身を説明できる人間がいなくなる時代」の始まりかもしれない。

ガバナンスの再定義：AI時代の品質保証

「AIを監査する」という新たなエンジニアリング

1. 設計判断の可視化 (Design Rationalization)



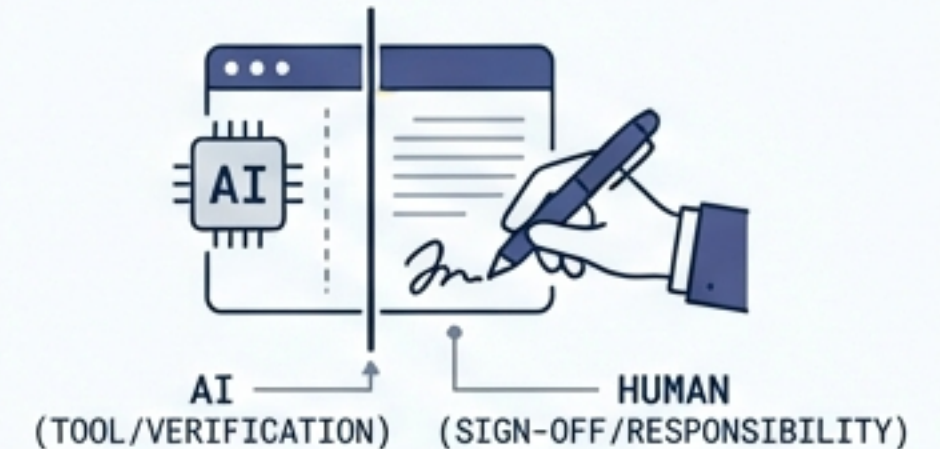
AIがなぜその設計・コードを選択したか、判断の経緯と根拠をログとして自動記録し、人間がレビュー可能な状態（証跡）を残す。

2. 品質KPIの転換



「開発速度」だけでなく、「変更後の不具合発生率」「脆弱性混入率」「MTTR」を最重要指標に設定。速度偏重による品質低下を牽制する。

3. 責任分界点の明確化



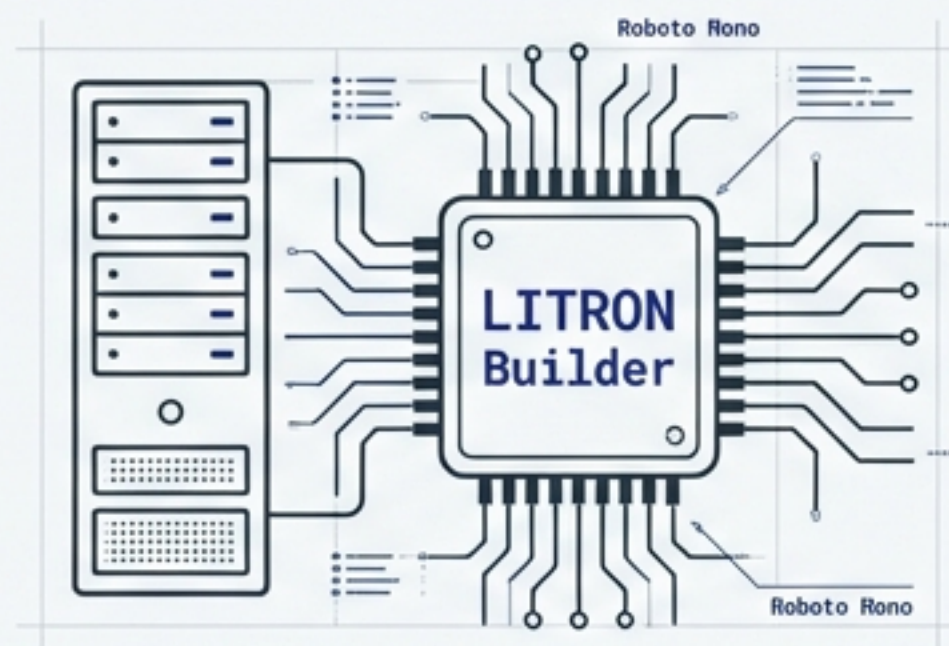
AIに法的責任は問えない。AIはあくまで「早く検証する道具」とし、最終的な承認（Sign-off）をどこで人間が行うか、厳格なルールを定める。

NTTデータの勝算：3つの戦略的優位性



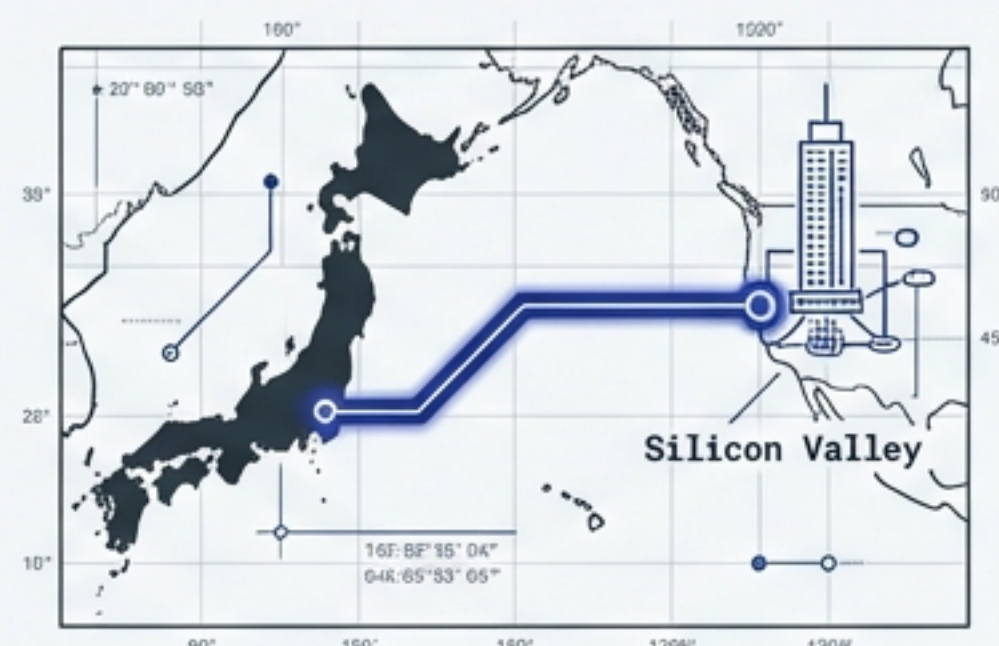
Strategy 1: 圧倒的な人材投資 (Talent)

2025年時点で約7万人が生成AI研修を受講済み。2027年度までにグローバル含む20万人の全社員を対象に、4段階のレベル別研修を実施。「全社員がAI人材」体制へ。



Strategy 2: 独自プラットフォーム (Platform)

「LITRON Builder (リترون・ビルダー)」(2026年4月提供)。クライアント企業が自社業務に特化した生成AIエージェントを開発できる基盤を提供し、単なるSIからAIソリューション提供へ拡張。

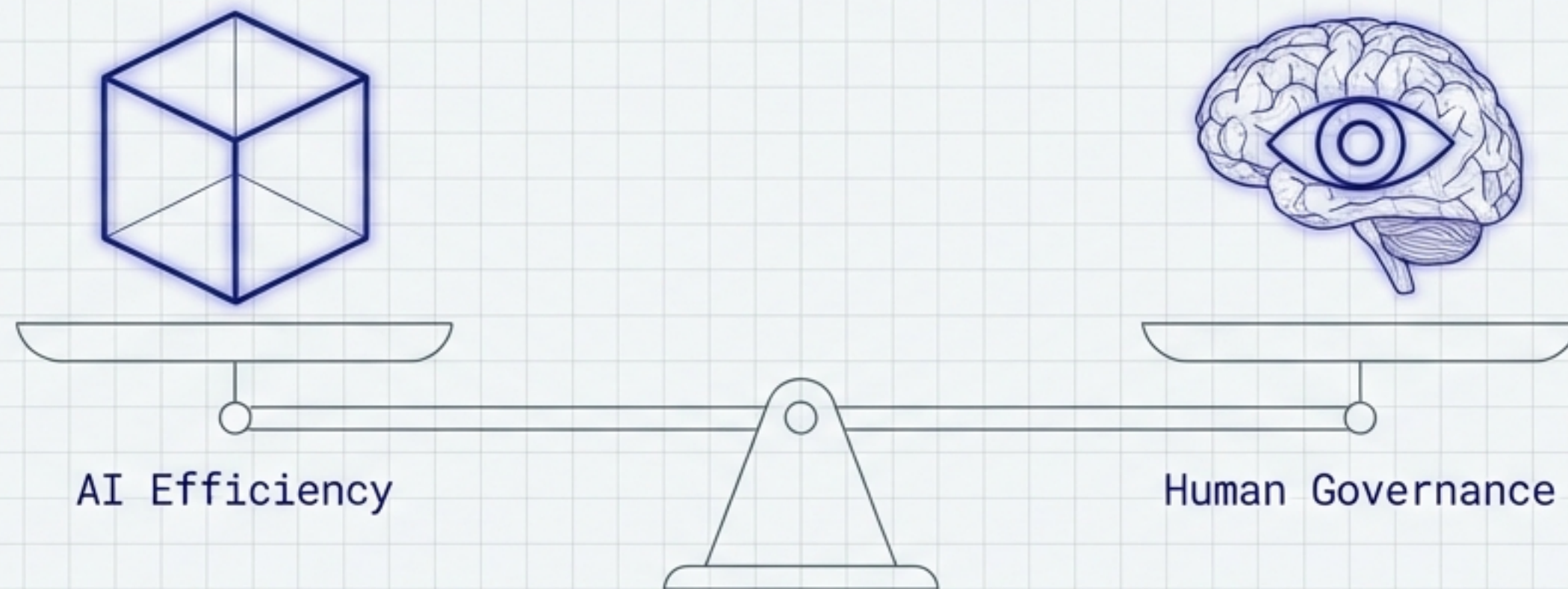


Strategy 3: グローバル展開 (Global Scale)

シリコンバレーに新会社「NTT DATA AI Vista」を設立。NTTグループの総力を挙げ、海外のITジャイアントに対抗しうる「日本発の標準モデル」構築を目指す。

結論：問われるのは「AIを疑う知性」

技術の進化が問いかける、人間の新たな役割



NTTデータの「全工程AI自動化」は、人材不足の救世主となる可能性が高いが、それは「統制なき自動化」であってはならない。成功の鍵は、AIの出力に対して常に「なぜ？」「根拠は？」と問い続け、手綱を握り続ける組織能力（Human Intelligence）にある。

**あなたの組織は、「作る（Making）」ことをやめ、
「指揮する（Directing）」準備ができていますか？**

Appendix: Key Data & Sources

Target	FY2030 productivity +50% (Source: NTT Data Report)
Reskilling	70,000 employees trained by Oct 2025 ; Target 200,000 global employees by FY2027
Market Growth	Domestic IT market to reach 9.7 trillion JPY by 2029 (+40% vs 2024)
Competitor Benchmark	Fujitsu (GitHub Copilot) ~20% productivity in coding; NTT Data targets ~52% in full process
New Entity	NTT DATA AIVista (Silicon Valley, established Dec 2025)